

海外 移住

平成元年7月1日発行[毎月1回1日発行]

ISSN 0388-6522

no.495



7

●1989

JICA

国際協力事業団

オーストラリア生活 ア・ラ・カルト

●鈴木 勝(日本交通公社北京事務所勤務)
(長・前シドニー事務所勤務)



次男のあだ名は“シドニー”

いと思う。

車は体の一部なり…

「シドニー・シドニー」と家の外で声がした。次男の剛がゴソゴソと外に出て行った。五年近くシドニーに住み、帰国して三年、中学生になる次男はいつの間にかクラスで「シドニー」というあだ名をちようだいした。本人はニヤニヤしながら、まんざらでもなさそうである。次男をはじめ家族のみんなにいまだオーストラリアの余韻が残っている。

私の転勤にともない、一九八一年

から八六年まで家族全員がシドニーで暮らした。私は帰国後も仕事上豪州との関係が深く、時たまオーストラリアへ渡る生活を続けている。時折、豪州からのプライベートなお客も我が家を訪ねてくる。妻は駐在時代の夫人連とのミーティングで出かけることも多く、情報交換で夜遅くなることもある。息子たちはシドニー日本人学校の同窓会などに出席したりしている。

私たち家族にとってオーストラリアはすっかり“第二の故郷”となつていて。今日はそんなオーストラリアでの生活について、二、三述べた

シドニーやメルボルンの大都市など、バスや電車を利用できる地域を除いて、オーストラリアでは車が体の一部となっている。車がないと行動半径は極端に小さくなる。我が家ではシドニー到着後直ちに新車を一台購入した。これに、帰国する駐在員仲間から譲り受けたセコンドハンドのもう一台を加えて妻とともに四年半、オーストラリアを動きまわった。そのため、自動車にまつわる思い出は数多い。

楽しいドライブもかなりあるが、反面、事故などの苦い思い出も多い。免許を取りたての妻は大きな事故はなかつたものの、車体のかすり傷は絶えなかつた。私は体に異常をきたさない中程度の事故を二回起こしている。一度は社用車で三重衝突の元凶になり、他の一回は反対に後部から追突された。このときは相手方が誠意を見せてくれず、最終的に修理代金を受け取るまで二ヶ月以上かかりてしまった。

私自身、加害者と被害者の両方を

経験したことになる。事故そのものは不幸な事件であったが、オーストラリア人と直接対面したことはよい経験でもあった。被害者になつたときには意外に寛大さを示し、反対に加害者になつたときはなかなか非を認めようとしない——そんなオーストラリア人気質に出会つたことも小さな発見であった。

"まさか"の時のN.R.M.A

「車の国」といわれるだけあってオーストラリアは車に関するシステムはかなり発達している。例えば、ドライブ中の車の故障や事故に際しては、日本でいえば日本自動車連盟(J.A.F.)的存在的な『N.R.M.A』が「救世主」のような役割を果たしてくれるのである。日本では事故を起こした場合、山の中ならともかく、どこでも比較的簡単に連絡がとれる。オーストラリアでは一步郊外に出れば、人も車も極めて少ない。故障ともなれば途方に暮れる。ウイークエンドであればなおさらである。

そんなとき、最寄りのN.R.M.Aに緊急電話をかけば、どんな郊外、山の中でも七つ道具、いや、それ以上おきらである。

もう一つドライブで思い出すのは、便利なガソリンスタンドのセルフサービスである。豪州に着いて間もなくこらは、自分でガソリンのホース

上に修理器具を満載したスーパーカーがやってくる。まさに二十四時間体制である。困難な故障も一応は動ける状態にして、ともかく市内まで行けるようにしてくれる。四年半の間に、車内にキーを置いたままドアを閉めてしまい山中で何時間も待つたり、またガソリンスタンドを捲しているうちにガソリンが切れ、道路に立ち往生して、スーパーのojisanに笑われたりしたことが数回あった。

こんな便利なN.R.M.Aサービスネットワークをわずかな年会費で利用できるのも、「車の国」—オーストラリアならではだろう。駐在員および移住者にはオーストラリアに到着後、直ちに加入することをおすすめしたい。オーストラリアは広大で一見不便そうだが、目立たないがしかし、車の國—オーストラリアの中古車セールスも盛んである。郊外の広大な敷地を利用して、ピカピカの中古車が値段をつけて陳列されている。素人目には良いのか悪いのか外見からはまったく識別できない。一台一台根気よくチェックしていくしかない。ウイークエンドともなれば中古車センターは家族連れで賑わっている。日本への帰国に際して、わが愛車一台もこれらのセンターの世話をなつた。日本のように使い捨てでなく、中古車を丁寧に修理して利用するリサイクル精神はおおいに考えさせられる。

■仕事等
八六年より勤務していたサドキン社を八八年六月末日付で退職。同社の操業縮小による。同年八月電話工事会社であるボビエル協和社に出向入社。開発青年任期満了後も継続して勤務するはずであったが、私の身上の都合により八九年二月二十日付で退職。これから当初の目的つまり独立経営へ向かつての第一ステップが始まる。

■今後の進路
「独立」とひと言でいつても、実際

を引っぱってガチャガチャと給油するのは怖い感じであつたが、慣れてしまえば大変便利。日本にいるときはガソリンは「マンタン」に入れることが当たり前と思つていたが、オーストラリアでは持ち金にあわせて給油する。妻は所持金がなかつたといつて堂々と一ドル(約百円)しか入れなかつたこともあつた。

また、オーストラリアでは新車販売とともに中古車セールスも盛んである。郊外の広大な敷地を利用して、

■近況・生活環境
一九八九年二月十四日、契約の三年としての役目を終了する。

一九八八年九月十七日、伯人女性との婚姻により定住の意志を固め、八九年二月サンバウロ市郊外のグアルーリヨス市ビラ・ロザリア地区に一軒家を購入、同月二十五日入居。

永住権に関する話題は以下のところ、元受入先のブラジル工業移住者協会が顧問弁護士を通じ、その取得にむけて遂行中。早ければ八九年三月末にも申請、仮永住査証(「プロトコール」)取得の運びとなるが、実際に多少の困難が予想される。だが時間の問題と思われる。

海外開拓青年報告書より
佐々木 智幸(一期生)

も珍しい。駐在五年間にさまざまなパーティに出席した。ホテルで行なうフォーマルなものからプールサイドや原っぱでのビールパーティーまでさまざま。共通していることは、思い思いの服装と身近な話題である。「フォーマル」などと招待状に特に記されていない限り、出席者各人が自由な服装で出席する。ある人はブ

ラック・タイでまつたくフォーマルかと思えば、ノーネクタイでカラフルな格好の人もいる。それでいて雰囲気を壊すような服装ではない。よくフィットしているな、と感心することが多かった。



〈上〉筆者の家族。エアーズロック付近。
〈下〉楽しいパーティーでの一枚(左端が筆者)

しかし、日本人の私には「服装は自由！」という招待状は反面苦手であつた。駐在間もないころは悩みの一つでもあつたが、だんだん慣れていった。服装同様、会話もずいぶん気きで、会は盛り上がる。「座る形式」よりビールやワインのグラスを手にした「ビュッフェ・スタイル」に人気がある。

ビジネスパーティーでもプライベートパーティーでも必ず「家族」の話題が出る。そして子供の話に及ぶ。「長男と次男が日本人学校に、そして三男が地元のオーストラリアンスクールに行っている……」と話が進むこと多かった。

さて、パーティーでつらいのは相手の名前を思い出せないことである。何回か出席するうちに顔見知りが増える。しかし、大変なことは名前が出てこないことである。相手は「スズキ！スズキ！」といとも簡単に会話の中に挿入して、親愛の情を表していく。こちらは「ビルだつたかな、ジョンだつたかな？」と迷い、何とかごまかして話を続けることがしばしば。日本人の私にとつて英語の名前は何と覚えにくいか。それには比べ、オーストラリア人はメモ帳に記し、いつも暗記練習をしていに覚えてしまう。パーティのたびに常に痛感し、何とかオーストラリア人のあのノウハウを体得しようとしているのだが、いまだに身につかないでいる。

むと、三男についていろいろな質問が飛んで、みんなの目が輝いてくる。オーストラリア人にとつて家族は常に「一緒にいるもの」のようである。たとえビジネスパーティーの席上であつても……。

体得したい記憶術

だが、私もまだ二三歳である。日本では難しい年齢（再出発という意味において）だろうが、そこはブライジルである。「なんとかする」にはまだ十分若いと思える。一、二度転ぶ可能性は大いにあろうが、起き上がる余力はまだあると思う。

■感想

開発青年は「甘えた制度」だと日本系コロニアの人はいまだに言う。そんな中での三年間には実に筆舌に尽くせぬ苦労も多かつた。

私の場合、開発とは、自己の開発あるいは発見を意味するものとなつた。渡航前まで電気にしか能がないと思っていた自分が、必要に迫られて、化学や機械をはじめおよそ専門外の分野にまで手を出すようになつた。これらの知識はもともと皆無くせぬ苦労も多かつた。だがそれは学校で習つたという程度でしかない。少なくとも自分ではそう信じ込んでいた。それが必要という文字によつて刺激された。活性化され

たと言うべきだろうか。要するにブ